2	視　写
言葉の力をつけよう（辞書引き③） 佐賀新聞　有明抄「若者言葉の先取り」	名　前

やってみよう

新聞の第一面にあるコラム記事です。「有明抄」を音読して、分からない言葉や漢字は辞書で調べて、表に書き出しましょう。また、この記事を読んだ感想や意見をあとに書きましょう。

有明抄　「若者言葉の先取り」

「すごい」ことを「すごっ」、「寒い」を「寒っ」という。文化庁の国語世論調査で、七十～八十％台の人が「気にならない」と答えているから、若者だけでなく大人にも浸透した言葉遣いだろう◆この末尾を促音（そくおん）で終わる表現、どこかで聞いたような気がすると考えたら、佐賀弁に思い当たった。「そがんとも知らんとや」に「いんにゃ、知っとっ（知っている）」と言い返す。玄関を出て「ありゃ、雨が降いよっ（降っている）」と気づく◆末尾の「る」がほとんど促音として発音される。ほかにも「逃げる」を「ちんにぐっ」、「捨てる」を「ふっつっ」、「寝る」を「ぬっ」などがある。佐賀弁の促音止めは、当世の若者言葉の先駆けだったかも。都会へのコンプレックスからか、あまり使われなくなったのは残念である◆佐賀弁がもっとも輝いていたのは、筑紫美主子（つくしみすこ）さんの「佐賀にわか」の舞台だった。佐賀弁が縦横に行き交い、そのニュアンスが笑いを誘う。決めゼリフの「あんみゃあかっ」は、ドタバタを締めくくるにふさわしく、観客の喝采を浴びた◆九十歳になる筑紫さんは、今は車いす生活だが、十一月六日に佐賀市民会館で芸歴七十五周年記念公演を開く。演じるのは大衆演劇の役者たち。体調が良ければ筑紫さんも舞台に立つことを検討している。佐賀弁をまた「聞いてみたかっ」。

佐賀新聞　平成二十三年九月十八日付　一面

注　佐賀弁を駆使した即興喜劇のにわかは、江戸時代に祭礼などで素人が演じた即興劇が始まりとされ、各地に広まり寄席や劇場にも進出したが、明治後期以降は博多など一部の地域を除いて衰退した。

調べた語句	意味・用法

あなたの感想や意見を書きましょう。